

## 後期終業式 式辞 ～ いつの日か 必ず～

先日、ミラノ・コルティナオリンピック（2026年 冬季オリンピック）が閉幕しましたが、日本選手の活躍は素晴らしく、日本に多くの感動を与えました。金5、銀7、銅12、合計24個のメダル獲得は、これまで最多とのこと。その中でも、世界的に注目を浴び、日本国民に最も感動を与えたのは、フィギュアスケートペア競技の三浦璃空と木原龍一選手、いわゆる「リクリュウ」のペアでした。金メダル獲得後、二人の活躍や生き方、人間性等について報じられましたが、その中には我々が生きていく上で大切な教訓が多くありました。

はじめに木原龍一選手についてお話します。2019年、実力に限界を感じ引退を考えていたとき、ペアの初心者をサポートするアルバイト（無償）の誘いを受け、後進の指導に力を注ぎました。同じ職場の先輩が言うには「ナイスガイで好青年、人当たりが柔らかくて誰からも好かれる存在。リンクに子供が訪れたときは、しゃがみ込んで目線を合わせる」とのことです。あるとき、運命の出会いが訪れました。アルバイト料を受け取らず、初心者を熱心にサポートする龍一を全日本代表チームコーチ ブルーノ・マルコットが見ていました。「龍一なら必ず璃空（三浦璃空）を選手として、人として大切にしてくれる。そして璃空の夢を叶えてくれる」。こう確信したブルーノコーチは、ある日帰ろうとしていた龍一に声をかけました。「龍一、靴をはけ!」「一度、三浦璃空と滑って見ないか?」。リンクに行くときリクが待っていた。当時17歳の璃空が龍一に語りかけます。「一緒にやりませんか?」、これが「リクリュウ」誕生の瞬間でした。

その場で“トライアウト（試し滑り）”が行われましたが、お互いに「雷が落ちた」と表現するほどの衝撃を受けたと語っています。「リクリュウ」に何が起こったのか…。龍一が璃空を投げ上げた瞬間、想像以上の高さまで上がり、周囲を驚かせました。これが「リクリュウ」最大の武器、頭上に投げ上げ3回転させる大技「トリプルツイストリフト」へとつながります。

ペアを組むことになった龍一は、常に璃空と行動を共にすることを心がけました。共に食事をし、睡眠・起床時間を合わせ、買い物も散歩も同行する。その理由は、勝利には細胞レベルでシンクロ（一致）することが必要と考えたからとのこと。龍一はいつも璃空に語りかけます。「絶対、僕は落とさない。落ちるときは僕が下敷きになる」。こうして、お互いの信頼関係が日を追うごとに高まっていきました。

しかし、「リクリュウ」に絶望がやってきます。オリンピック1日目のショートプログラムで、大技「リフト」のとき、龍一が持ち上げた璃空を落としそうになりました。大幅な減点、取り返しのつかない大きなミス、首位のドイツとは大きく点数が開き、2日目のフリー競技で逆転するにはあまりにも大きな差となっており、周囲も絶望を感じていました。龍一にとって、このミスは想像以上のダメージでした。それは、璃空に「絶対 僕は落とさない。落ちるときは僕が下敷きになる」と言いながら、絶対ミスしてはならないときに落としそうになり、このことで璃空の夢まで奪ってしまったと感じたからです。2日目、フリー競技の本番前の練習で、龍一はミスを繰り返します。そんな龍一に璃空が語りかけます。「最後は龍くんのために滑るから」。この言葉で龍一は目が覚めました。自分がすべきことは、璃空への謝罪ではない、フリー競技で最高得点を出し、璃空の夢を叶えることだと気づきました。龍一は璃空にこう返します。「最後はお互いのために滑ろう」。試合後のインタビューで、璃空はこのとき勝利を確信したと語っています。

フリーに臨んだ「リクリュウ」はまさに敵なし。圧巻の演技を皆さんもテレビで見たと思いま

す。解説の高橋さんが「宇宙一の演技」と表現しましたが、誰もが納得したと思います。158点をたたき出し、歴代最高得点、そして逆転の金メダルを獲得しました。金メダルが決まった瞬間、二人が喜びを表現せず、静かに体を寄せ合い涙ぐむ姿に多くの人が心を打たれました。

金メダル獲得から8日後、日本記者クラブの記者会見で、「金メダル決定の瞬間、喜びを表現しなかったのはなぜですか？」と質問されとき、龍一が答えます。「お互いが苦勞してきた過程がわかっている。一緒に戦ったライバルたちの前で、全力で喜ぶことはできなかった」。そして「今後、次のオリンピックを目指しますか？」との質問に璃空が答えます。「お互いに話してないので まだわからない。木原選手が引退するときは私も引退する。私が違う人と組んで滑ることは絶対はない」。この回答を聞いて、二人がどれほど人を大切にしているかが伝わります。

2019年、璃空とペアーを組む前から、アルバイト料を受け取らず初心者を熱心にサポートする龍一を、コーチと璃空は見ていました。そして、この人なら必ず自分の夢を叶えてくれると確信しました。龍一はチャンスを求めたわけではなく、チャンスが向こうからやってきました。人を大切にすることは大きなチャンスを運んでくる、その理由は自分一人ではないからです。最初は一人かもしれない。でも、自分が全力で走っているとき、気がつけば多くの仲間と一緒に走っていることに気付きます。自分の周りには、多くの人に関わっています。学校の先生、友達、先輩や後輩、アルバイト先の店長、父母、兄弟、姉妹、その他自分を励まし、支える多くの人があります。この人たちが自分の夢実現そして自分の幸せにはなくてはならない存在です。そして、自分自身も誰かにとって大切な存在になっていることを忘れないでください。これからの人生において、いつの日か必ず皆さんも大切な人に出会えることを私は確信しています。

来年度もみなさんにとって実りある高校生活になることを願っています。

令和8年3月 23日

兵庫県立西宮香風高等学校長 桑田 圭介